
大学生探偵シリーズ 日本史殺人事件

ゆっきー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大学生探偵シリーズ 日本史殺人事件

【Nコード】

N3166F

【作者名】

ゆっきー

【あらすじ】

知り合いの史学科の教授から日本史の展覧会に行かないかと誘われた宏明は、紀美と共に史学部生徒と教授と行くことになった。日本史の展覧会に行った数日後に、史学科の生徒の中の一人が何者かによって殺害されてしまう。

展覧会の誘い

二月中旬、宏明の大学は春休みに入ったばかりで、学内はいつもより静かだった。どこからかわからないが、軽音の練習している音が聞こえてくるだけだ。

宏明はバイクの駐輪場から図書館まで颯爽と歩いていく。

今日は調べる事があって、本を借りようと大学までやってきたのだ。図書館に入ると、宏明は真っ先に目的の本が置いてある場所へと向かった。本棚にぎっしりと置いてある本の中を、目的の本を探すのは容易なことではない。宏明は約七、八分で目的の本を五冊を見つけ、中身を確かめてから、そのうち二冊を借りることにした。

図書館から出ると、学内にある自動販売機へと向かった。宏明が缶コーヒーを取り出し口から取り出した時だった。

「二葉君？」

背後から中年の男性の声で、宏明は呼ばれた。

「あ、中谷教授。お久しぶりです」

宏明は頭を軽く下げて挨拶する。

「今日はどうしたのかね？」

「図書館に用がありました」

「そうか。僕の部屋に来ないか？ 久しぶりにゆっくりと話もしたいからね」

中谷教授は日焼けした顔を微笑ませて言った。

宏明はい、と返事をして、中谷教授の部屋へと向かうことになった。

四階建ての学舎がいくつも並ぶ中を、二人は時折話しながら歩いて行った。大学内の一番奥にある学舎の二階に、中谷教授な部屋があった。部屋の中は、宏明が思っていた以上に広かった。宏明は客用のイスに座ると、軽いため息をついた。

「二葉君、何か飲むかい？」

中谷教授はマグカップを二つ取り、宏明に聞く。

「いや、さつき缶コーヒー買ったんで…」

宏明は遠慮がちに答えた。

「遠慮しなくてもいいんだよ。コーヒーか紅茶、どっちがいい？」

「では、コーヒーで…」

宏明の答えを聞くと、中谷教授は急いでコーヒーを入れて、宏明の向かいへと座った。

「二葉君は国文科だったわけ？」

「はい。国語の教師になりたいくて…」

「そうか。いつから国語の教師に…？」

中谷教授はコーヒーをすすってから聞いた。

「中二の時です。オレのクラスに教育実習に来た大学生の人が、大きな影響を与えて、“教師になりたい”って思ってたんです」

「教師の道は厳しいけど、自分を信じていくんだよ」

「はい」

宏明は希望に満ちた返事をした。

今、部屋にお邪魔している中谷教授は、宏明の父親の高校時代の部活の先輩で、宏明が大学に入る前に何度か会ったことのある人物なのだ。

宏明の父親と中谷教授の再会は、今から十年前の部活の同窓会で、それから年に何度か会っているのだ。

中谷教授は史学部で、宏明の学科には直接教えてもらう機会がないのだが、学内で会うと気軽に声をかけてきてくれるのだ。

「父親は元気にしてるかい？」

「はい、おかげさまで…」

「健康が第一だからな。それより、今月の二十五日は空いてるかな？」

中谷教授は立ち上がり、机に置いてあるカバンの中に手を入れながら聞いた。

「今のところは何もないです」

宏明は中谷教授に疑問の目を向けて答えた。

「実はね、国立博物館で日本史展覧会というのがあるんだ。一緒に行こうと思ってるね」

パンフレットを宏明の前に差し出す中谷教授。

「史学部の生徒も何人が誘ってるんだがね。まあ、二葉君の場合は学科が違うからおもしろくはないかもしれないが…」

中谷教授は苦笑いしながら言った。

「行きます。これも勉強なんで…」

「行ってくれるのか。嬉しいな」

「オレ、まだ一度も国立博物館に行ったことないんです」

「そうか。午前中に行こうと思ってるんだがどうだい？」

「大丈夫です」

宏明はパンフレットを机に置いてから答える。

「時間が決まれば、こつちから連絡するよ」

「あ、はい。じゃあ、オレのケータイ番号教えます」

中谷教授は紙に宏明のケータイ番号を書き留めた。

「史学部の生徒って何人来る予定なんですか？」

「今、誘ってるのは五人だ」

「五人ですか…」

——意外と少ないんだな。もつと来るのかと思ってた。

「五人中二人は確実に来るよ」

「その二人は返事したんですか？」

「うん。熱心な生徒なもんでね」

中谷教授は嬉しそうに答える。

それから、二人はひとしきり話をする、宏明は中谷教授の部屋を後にした。

「え？ 日本史の展覧会？」

紀美は首を傾げた。

あのあと、宏明は紀美の家に遊びに行ったのだ。

宏明は学内の自動販売機で買った缶コーヒを、紀美に温めてもらい飲んでいた。

「うん、史学部教授の誘いでな。紀美も行く？」

「まだ予定がわからないよ」

クッキー缶を開けながら答える紀美。

「わかった。ダメでも連絡くれたらいいぜ」

「宏君、最近、元気なことない？」

突然、紀美が聞く。

「そうか？」

「うん。宏君の友達、みんな言ってるよ」

紀美は心配しながら言う。

「思い違いだって。悩み事なんて別にねーし……」

「……ならいいんだけど」

紀美は少し沈んだ声を出す。

——嘘よ。宏君は悩み事があるはずだ。

と、確信していたし、自分が宏明の心の拠り所になれないことを悔やんでいた。

宏明のほうも、“悩み事はない”と答えたが、本当は悩み事があるのだ。しかし、今は誰にも言えないのだ。

「悩み事があったら言ってよね」

紀美は不安そうに言う。

「大丈夫。何かあれば言うから……」

宏明は心の中にある悩み事を隠して言った。

二人の間に沈黙が流れる。

最近の二人には、こういう沈黙が多くなった。こういう沈黙が多くなってきたこそ、紀美にとっては余計に不安になるし、宏明の支え

になりたい、心の拠り所になりたいと思っているのだ。付き合いが長いというのもあるが、長く側にいすぎてたんだと紀美は心淋しく思っていた。

——こんな感じになったのはいつからだっけ？　ずっと前からだったような気がする。

紀美は缶コ―ヒ―を飲む宏明の横顔を見て思っていた。

「日本史の展覧会に行くよ」

思いきって行ってみた紀美。

「え？　今、予定がわからないって…」

「いいの。他の予定が入っても行く」

「わかった」

頷く宏明。

紀美は日本史の展覧会に行かないと、二人の気持ちが変わってしまうと考えてしまったのだ。

「そろそろ帰るな。詳しい事が決まったら連絡する」

優しく微笑む宏明に、紀美は少しの安心感を覚えた。

紀美の涙の理由（前書き）

この章で出てくる日本史は、「サンライズ」という参考書を参考に書かせてもらいました。

紀美の涙の理由

二十五日の午前十時、国立博物館の前で、中谷教授
宏明と紀美は十時少し前に着いた。しばらく待つと、全員がやって
来た。

「やあ、二葉君」

中谷教授に軽く会釈する宏明。「その子は…？」

中谷教授は紀美に気付き、首を傾げる。

「オレの彼女です」

「西野紀美です」

紀美はゆっくりとした口調で、自分の名前を名乗った。

「そうか。こつちも紹介しなくちゃな。史学科の生徒だ」

中谷教授は史学科の生徒のほうを見た。

「茶山健です」

元氣よく健は挨拶する。

健は背の高い爽やかな青年だ。

「薬丸庸子です」

庸子はギャル系で、ミニのタイトスカートに黒のニットを着ている。

「私は浦井有沙です。よろしくね」

有沙は大人っぽいしっとりとした人だ。

「オレは元山光一」

光一も庸子同様、今風のダボダボとした服装で金髪だ。

「オレは国文科の二葉宏明です」

「庸子、ファンじゃなかったっけ？」

有沙は言う。

「うん。私、ファンなのよ！」

庸子は熱い視線を宏明に向けた。

「は、はあ……」

庸子の熱い視線に困惑してしまう宏明。

「二葉さん、困ってるだろ？」

光一は呆れた口調で庸子に言う。

「何よ？ いいじゃない」

庸子は光一を睨み付ける。

「まあまあ……。中に入ろう」

中谷教授はなだめつつ生徒を催促した。

七人は中に入ると、辺りを見渡した。

中は日本史の資料や置物がところせましに置いてあり、国文科の宏明と紀美でさえも興味を持ってしまう。

「今回の展覧会は、聖徳太子の政治や大化の改新などの古代国家の歩みなんですね」

有沙は目を輝かせて言った。

「そうだな。おれ、この部分が好きなんだ」

頷きながら答える健。

「二葉君、日本史は得意かい？」

物珍しそうに見ている宏明に聞いてくる中谷教授。

「どちらかというと、苦手です」

「彼女は？」

「私事です」

「そうか。日本史は奥が深いからね。話を聞くだけでも楽しいんだがね」

中谷教授は少し残念そうな表情をした。

「教授の話、聞いてて楽しいんですよ。毎年、前期と後期には、教授の授業を取る生徒が多いんですよ」

庸子は宏明の横に来て教えてくれる。

「へえ……」

「そんなに楽しい授業ではないがね」

苦笑する中谷教授。

「先生、そんなことないぜ」

光一はフオーする。

「そう言ってもらえると光荣だね」

中谷教授は苦笑した表情から照れ笑いしながら言った。

「ここは奈良の都のことみたいですね」

健は立ち止まる。

「奈良の都といえば、平城京ですね」

「うん。平城京の産業は発達していて、特に鉱山の開発が進んでいたんだ。武蔵の銅が代表的なのよ」

有沙は置物を見ながら、宏明と紀美に言った。

「貨幣もすごいですよね？」

宏明は聞く。

「そうよ。和同開珎が作られたんだ」

「政府は和同開珎が流通するように、役人の給与を貨幣で支払ったり、税の税納を命じたりしたんだけど、一般的には物々交換が行われていて、都やその周辺でしか使われてなかったんだ。そして、和同開珎は唐の都長安の遺跡から五枚発見された他、渤海の都の宮殿跡からも発見されているんだ」

有沙の後に中谷教授はゆったりした口調で説明した。

七人はそれぞれに見た後、国立博物館の同じ敷地内にある喫茶店でお茶することになった。

「二人共、国文科でしたっけ？」

健は宏明と紀美に聞いた。

「そうです」

「じゃあ、将来は国語の教師なの？」

「オレは国語の教師目指してます。でも、紀美は…」

宏明は紀美を横目で見る。

「私は図書館の司書になりたいなって思ってます」

「へえ…そうなんだ。二人共、いい夢持ってるんだね」

健は微笑みながら言った。

「ねえ、二葉さん、外行こうよ！」

突然、庸子が宏明の腕を掴んだ。

「え？ 外に…」

「じゃあ、そろそろ行こうか」

庸子が外に出たそうにしているのを察して、中谷教授は言った。
七人は喫茶店を出て、少し散歩することになった。

「こっち行こう！」

まだ庸子は宏明の腕を掴んでいる。

宏明はバツの悪そうな表情をしている。

「まったく、仕方のない娘ねえ…」

有沙は呆れている。

「浦井さん…」

庸子に腕を掴まれている宏明を切なそうに見ていた紀美は、背後から来た有沙に顔を向けた。

「二葉さんには彼女がいるというのに…。気にしちゃダメよ」

「あ、はい」

「付き合ってどれくらい？」

「二年ちよつとです」

紀美の脳裏には、宏明に告白された時のことが蘇った。

「長いんだね」

「よく言われます」

宏明と庸子の楽しそうな姿を、再び切なそうに見つめて答えた紀美。
——宏君の笑顔、久しぶりに見たような気がする。このところ、全く笑ってくれなかったから…。

紀美は小さくため息をつきながら思っていた。

「薬丸さんていつから宏君のファンなんですか？」

不安そうに有沙に聞いてみた紀美。

「痴漢騒ぎがあつただろ？ あれが二葉さんってわかってからだよ」
二人の会話を聞いていた光一が背後から答えた。

「そうなんですか…」

「何考えてるのかわからねーよな。場をわきまえろってカンジだよな」

光一ははしゃぐ庸子を見ながら言った。

「どうやって痴漢の犯人見つけたんだろう？」

健も近付いてくる。

「さあ…。私もよくわからないんです」

「彼女もわからないのに、おれらにもわからないってことか」

健は残念そうに言う。

——他に好きな娘でも出来たのかな？ 出来たなら言って欲しいんだけどな。

紀美の中で二年ちよつとも付き合っただから、宏明に他に好きな女性が出来ても悔いはない、と思うようになっていたのだ。

「二葉さんのところに行つてきなよ」

有沙が肘で紀美をつつく。

「はあ…」

「庸子のことはいいから…。彼女なわけだし、ドーンと行かなくちゃ」

有沙はアドバイスする。

「はい」

紀美は返事すると、二人のところまで行つた。

「宏君！！」

「お、紀美…」

「何してんの？」

「いや、なんか、国立博物館って綺麗だなんて…」

「ふーん…」

今にも泣き出してしまいそうな紀美は、国立博物館のほうを見た。

「宏君って呼んでるんだ？ 私もそう呼んじゃおうかな？」

庸子はチラッと宏明を見て言った。

「好きなように…」

いつもなら断る宏明は、簡単に承諾してしまう。

その時だった。紀美の張りつめていた緊張の糸が、プツンと切れて、紀美の頬から涙がこぼれ始めた。

「の、紀美?!」

突然の出来事に驚いて慌ててしまう宏明。

「うつん、なんでもないの」

紀美は首を横に振り、手のひらで涙をぬぐい、無理に笑顔を作る。

「どうしたんだよ? 急に…」

「なんでもない。トイレに行ってくるね」

トイレに行こうとする紀美の腕を掴む宏明。

「ちょっと二人で話してくる」

「うん、わかった」

わけがわからずうなづく庸子。

その様子を心配そうに見つめる中谷教授達。

二人は博物館内に入り、誰もいない場所へと向かった。

「いきなりどうしたんだよ?」

「なんでもない」

「なんでもないことないだろ?」

宏明は少し怒り気味で聞く。

「今だから聞くけど、宏君、他に好きな娘いるんでしょ? いるんだったら、遠慮せずに言ってくれたらいいのに…」

紀美は宏明に背を向けて、溢れ出る涙をぬぐいながら、自分の中に溜まった想いを言った。

「いるわけないだろ」

「ウソ! だって、私わかるもん。さっきもそうだけど、宏君なんか違うもん」

「紀美…」

宏明は言い返す言葉もなく、紀美の名前を呟くままだ。

紀美の言ったことは本当ではないが、数日前から抱えている悩みがあると言う決心した。

「実は悩み事があるんだ。今はその内容は言えねーけど…」

「それならそうだって言ってくれたらいいのに…」

「言えるわけねーだろ? 言ったら、紀美を心配させるだけだしな。」

黙ってて悪かった」

謝る宏明に、頷くことしか出来ない紀美。

「大丈夫かい？」

中谷教授が心配して二人に近付いてくる。

「あ、はい、大丈夫です」

笑顔で答える宏明。

「何があつたか知らないが、彼女を泣かすのは良くない事だ。大切にしなければいけない」

宏明に優しく叱る中谷教授。

「わかりました」

「行こう。入り口でみんなが待つてる」

中谷教授はみんなのいる入り口に向かって歩き始めた。

宏明は紀美の頭を撫でながら歩き始める。

「大丈夫？」

有沙が紀美に声をかける。

「はい」

涙目の紀美は、声を震わせて返事する。

「ごめんね」庸子は三人にキツく言われたのか、すまなそうに紀美に謝った。

「教授、これからどうします？」

光一が中谷教授にこれからどうするか聞いた。

「私の家に来るかい？」

「行きます！」

「私もっ！」

「じゃあ、行こうか。日本史の話をしよう」

中谷教授の家に着くと、部屋に通された。

六畳程の部屋だ。

「今日の国立博物館はどうだったかな？　少しは参考になったかな？」

「はい。とても参考になりました」

代表で有沙が答えた。

「僕、展示してあった平城京にすごく興味があるんです」
健は言った。

「そうか。平城京は東西約四、二km、南北約四、八kmであるんだ。東側に東西一、五km、南北四、二kmの外京があるんだ。これは重要だぞ」

中谷教授は重要だという部分に、宏明と紀美以外の四人に言った。

「はい。ごぼんの目のような規則的な道路で区切られていたんですよ」

光一は思い出しながら言う。

「そうだ。都には大寺院が建てられ、国分寺は国府の近くに建てられたんだ。今も国府台、国府津、府中、甲府や国分などの地名が残ってるんだ」

一気に説明してしまう中谷教授は、机の引き出したからタバコを一本取り出し、火をつけた。

「教授、タバコ吸うんですか？」

健は珍しそうに聞いた。

「ああ…たまにね」

中谷教授は煙を吐き出した後に答えた。

「教授がタバコ吸うなんて珍しいですね」

庸子も珍しそうに中谷教授がタバコ吸う姿を見ている。

「毎日、何本も吸うわけじゃないんだ。一週間に五本くらいってとこかな」

「今日は楽しかった」

有沙は伸びをしてから言った。

「もう二時か。そういえば、昼食がまだだったな。軽く何かご馳走

するよ」

中谷教授はタバコを消し、部屋を出て行った。

謎の暗号

国立博物館に行つて五日が経つた。

あの日、日本史の展覧会から宏明と紀美の関係はグクシヤクしたままだった。宏明は自分の中にある自分一人では解決しようのない悩み事を、紀美に打ち明けようか迷っていた。

その時だった。宏明のケータイが鳴った。

「もしもし？」

「二葉君か？ 谷崎だ。今から出て来られるか？」

電話の主は、谷崎警部だった。

「出られるけど何かあったのか？」

「二葉君と同じ大学の元山光一さんが殺害されたんだ」

「えっ？ 元山さんが？」

「ああ…。元山さんの家が現場で、東区だ」

「わかった。今から行く。最寄り駅つてわかる？」

「会田駅だ。駅から西に五分のところにある大きな家だ」

谷崎警部は一気に言うと、ケータイを切った。

そして、宏明は光一の家バイクで向かうことにし、約三十分後に到着した。警官に谷崎警部を呼んでもらい、現場へと通された。

「現場の状況は？」

「青酸カリで殺害されたんだ。リンゴジュースの中に混入されていた」

「青酸カリか。それよりなんでオレを呼んだんだよ？」

宏明はなぜ自分が呼ばれたのかわからないでいた。

「二葉君の知り合いだという教授が、二葉君の事を言ってたんだ」

「ああ、中谷教授か…」

宏明は日焼けした中谷教授の顔を思い出していた。

二人が現場となった光一の部屋に着くと、いつも通り鑑識が調べ回っている。光一が倒れていたと思われる場所には、紐などで形作ら

れていて、その近くにコップが落ち、青酸カリ入りのリンゴジュースがこぼれていた。

「来客があつたんだな。コップが二つもあるし、菓子が皿にたくさん盛つてあるな」

宏明は光一の倒れていた場所を見ながら言った。

「そうなんだ。現場はこんな感じだ。来客室に行こう。元山さんの親御さんや教授もいるし……」

二人は現場を後にすると、次に来客室へと向かった。

来客室には大物政治家の父親の誠一と料理教室の先生をしている母親の亜矢と教授や健達がいた。

「お待ちせしました。谷崎です」

「光一さんと同じ大学の二葉です」

二人は誠一に会釈をする。

間近で見る政治家はとても迫力がある。

「光一の父親の誠一です。こちらが母親の亜矢です」

誠一は自分と妻を紹介した。

「こちらに座つて下さい。オイ！ 刑事さんと二葉さんにもお茶を持つてこい！」

誠一は家政婦に命令した。

家政婦はかしこまりましたと言い残し、来客室を後にした。

「お構い無く。それと刑事ではなく警部です」

谷崎警部は遠慮がちに言った。

「そうでしたか。これは失礼を……」

「いえいえ、こちらこそ……」

谷崎警部は軽くため息をついた後に、

「早速なんですが、ご子息は今日一日中、家におられたのですか？」

「はい。今日は午後から友達が来ると言っていました」

亜矢が答える。

「誰が来るとかは聞いてませんか？」

「いや、聞いてないな。お前は？」

誠一は自分が答えると、亜矢に聞いた。

「私も何も聞いてないです」

「そうですか」

手帳に書き込みながら呟く谷崎警部。

「光一が亡くなったのは、何時頃なんでしょうか？」

亜矢が心配そうに聞いてきた。

「午後一時から三時半の間とみられています。その間のみなさんの
アリバイをお聞きしたいですが、どちらにいましたか？」

「私はゴルフに行っていました」

「誰とですか？」

「大学時代の友人とです。これが友人の住所と電話番号です。調べ
てもらえればわかります」

誠一は電話帳に書いてある大学時代の友人の名前の欄を、谷崎警部
に見せた。

「でも、お帰りが早いんですね？」

「寒い上に友人の体調が悪くなりましたんで、早目に切り上げたん
です」

「そうだったんですか」

「私は料理教室を振り替えでやっていたんです。本当は一日だっ
たんですが、私の用がありまして、今日になったんです」

次に亜矢が自分のアリバイを答えた。

「料理教室の時間は？」

「一時から三時までです。片付けをして、教室を出たのは四時前
です」

亜矢はさっきより小さな声で答えた。

「アリバイはアリだな。次に教授と史学科のみなさんは？」

谷崎警部は中谷教授達のほうを向いて聞いた。

「私は図書館にいました。中央図書館です」

先に中谷教授が答えた。

「私はバイトです。茶山君と同じバイトで、茶山君も同じ時間に入

ってました」

有沙ははつきりとした口調で答える。

「どこのバイトですか？」

「駅前のカフェです。俺達、十一時から四時まででした」

健がバイトの始まる時刻と終わった時刻を答える。

「私はゲーセンにいたけど…」

「誰かに会いましたか？」

「いつもつるんでる仲間と一緒にだった」

庸子は巻いてある毛先をいじりながら答える。

「みなさんにはアリバイがある、ということですね」

全員のアリバイを聞いて、やっと宏明が口を開いた。

「そうですよ」

誠一は自信ありげに言った。

「どちらが先に光一さんを発見したんですか？」

「私です」

誠一が答えた。

——なんか、変な感じだな。この光景…。

どこか府に落ちないでいる宏明。

「光一さんが殺害される理由は、何か心当たりありませんか？」

「わかりません」

亜矢が首を降って答える。

「あなた方は？」

「そんなこと知りません」

「そうですか」

谷崎警部は再び軽いため息をついた。

「国立博物館から気になってたんですけど、茶山さん達の組み合わせっておかしくないですか？　なんか、合っていないというか…いや、別に悪い意味ではないのですが…」

宏明はずっと引っかかっていた事を聞いてみた。

「オレと光一は、大学に入ってからからの友達なんです。入学当時、光

「一は庸子と付き合っていて…。別れても、二人は仲良かったですよ。有沙は庸子と友達なんです」

健は快く四人の経緯を話した。

「光一さんと付き合っていたんですか？」

驚いた様に聞く谷崎警部。

「そうよ。高三の二期から二期生の秋頃までね」

庸子はため息まじりで答えた。

——どうりで…。なんか、服装や雰囲気似てるからな。

宏明は心の中で納得していた。

「みなさん、何回生なんですか？」

「二葉さんと同じ三回生です」

「わかりました。簡単な質問はこれで終わりますので、解散してもらって結構ですよ」

谷崎警部は手帳を上着のポケットの中へ戻しながら言った。

「はい。光一の遺体はいつ戻るんでしょうか？」

亜矢はソファから立ち上がり聞いた。

「検死が終われば戻ってくるので、ご安心を…」

谷崎警部の答えを聞いた亜矢は、ホッとした表情をした。

そして、宏明は谷崎警部と共に来客室を出た。

「警部、何かおかしくないか？」

来客室から光一の部屋に戻る階段の上り途中で、宏明はもう一つの引っかかっていたことを、谷崎警部にぶつけてみた。

「光一さんの親御さんの事か？」

谷崎警部も宏明と同じ事を思っていたようだ。

「そつだ。普通、取り乱すとか泣き崩れるとかあるだろ？」

宏明はついさつき来客室で合った誠一と亜矢の態度を思い出していた。

「まあ、確かにそれは言ってるかもな。ああ見えて、内心、動揺しているんだろうな」

谷崎警部は光一の部屋の中に入り言った。

——自分の息子が亡くなったというのに……。

宏明はどうしても府に落ちないでいた。そして、光一の部屋の前で谷崎警部を待つことにした。

「警部、被害者の机の上に置いてあった“縦に四つ、横に三つ交わった場所”という文なんです。どういう意味なんですかね？」

若い刑事が谷崎警部に聞いたです。

若い刑事の言葉に、驚いて光一の部屋から顔だけを覗かせる宏明。

「さあ……。さつきから考えているんだがさっぱりだ」

首を横に振りながら答える谷崎警部。

——“縦に四つ、横に三つ交わった場所”か……。元山さんが残したダイニング・メッセージだな。一体、どこなんだろう？」

「二葉君、“縦に四つ、横に三つ交わった場所”ってわかるかい？」

谷崎警部は考え込む宏明に近付きながら聞いてきた。

「全く……。犯人の名前を示してるんだと思うけどな」

「犯人の名前……？」

谷崎警部は目を丸くする。

「確信はないけど、場所さえわかればわかると思う」

宏明は自信なさげに言った。

「でも、青酸カリで亡くなったのに、ダイニング・メッセージなんて残す暇なんてないだろ？ それに、今、机の上って……」

とつさにダイニング・メッセージが残せるのがおかしいと気付いた。

「紙にボールペンで書かれてあったんだ。恐らく、何の目的かはわからないが、犯人と会う前に書いたんだろ。犯人はこの紙に気付かず立ち去った、というところだろう」

そう言った後、谷崎警部は光一の机を見た。

「そういうことか……」

納得したように呟く宏明。

——紀美のことも片付いてないのに、事件なんて……。今回はどうちも両立しないといけないんだな。

内心、宏明は一抹の不安が駆け巡った。

「二葉君？」

「ん？」

「大丈夫かい？」

「うん。元山さんが残したダイニング・メッセージを考えてて…」
とつさに嘘を口にのせた。

「今回は政治家の息子が亡くなったんだ。下手に手出しは出来ないな」

谷崎警部は今後どうやって捜査をしようか考えながら言った。

翌日、宏明は久しぶりに茂と京子の三人で会うことになった。
紀美は誘っていない。

三人は京子が住んでいるマンションに集まった。

「今日、ノンちゃんは用事？」

紅茶を啜りながら京子が聞いてくる。

「まあ…そんなところ」

宏明は苦手な紅茶を目の前にして、ごまかしながら答えた。

「ノンちゃんがいないと変だよな」

茂はバター味のクッキーを口に入れながらぼやく。

「そうか？」

「うん。ヒロの隣にはいつもノンちゃんがいるからな」

「確かにそれは言ってる」

同感している京子。

——オレの隣に紀美、かあ…。

宏明は茂の言葉に、紀美の顔が浮かんだ。

「それより、話ってなんなのよ？」

京子は話題を切り替えた。

「実は昨日、事件が起こってな」

宏明は中谷教授と史学科の生徒と国立博物館へ行ったことから始まった事件を話した。国立博物館で紀美が涙した事以外は…。

「“縦に四つ、横に三つ交わった場所”って…？」

全てを聞き終えた京子が聞く。

「オレもわからねーんだ」

「そんな場所あるのかよ？」

「場所さえわかればあるんだろう。ダイニング・メッセージを解いたらの話だけど…」

宏明はあっさりと答えた。

「あるんだろうけど、何を指してるかわからねーじゃん。犯人がわかるかどうか…」

意外にあっさりと答えた宏明に、逆に聞き返す茂。

「この場所は、犯人の名前だ」

昨日、谷崎警部にも伝えたことを二人にも言った。

二人はえっ？ という表情をしている。

「犯人の名前って…どうやってわかったの？」

「なんとなくだ」

「なんとなくねえ…。ヒロらしいな」

「とにかく、早く事件解決しろよ。せつかくの春休みが台無しになっってしまうからな」

茂は忠告した。

気になる疑問

事件が発生してから、一週間が過ぎた。誠一の息子が亡くなった、ということ、マスコミは大きく取り上げて報道していた。

宏明はこのニュースが流れる度に、新しい情報を仕入れる事になっているが、ほぼ同じような内容であった。谷崎警部の元にも何度か足を運ぶ宏明だが、今回ばかりは大物政治家の息子の事件だということ、谷崎警部は多くは語ってはくれなかった。

途方に暮れた宏明に、中谷教授から大学まで来て欲しい、という連絡がきた。

宏明が大学の中谷教授の部屋に行くと、史学科の生徒も来ていた。

「みなさん、お揃いで…」

「ここに座ってくれ」

中谷教授は数日前とは違う表情で、宏明を迎えた。

「今日はどうされたんですか？」

宏明は座ると同時に、中谷教授に聞いた。

「うん、ちよつとな…」

「教授…？」

中谷教授はいつもと違う声のトーンに、心配してしまう宏明。

「今回の件で、私に非があつてな。違う大学へ異動になったんだ。来週に行く予定だ」

最後はわざと明るく言った。

「そんな…。別に教授が悪いわけじゃないのに…」

「理事長からの命令だ。仕方ない」

「どうにかならないのですか？」

有沙は必死に聞く。

「どうにもならないよ」

中谷教授は悲しい表情で呟いた。

——犯人のせいだ。なんとかしなくては…。

宏明は心の中で呟いた。

「二葉さん、犯人を捕まえて下さい。光一のためにも…」

庸子は中谷教授から宏明に向きを変えて、すぐるように言った。

「警察じゃないんでなんとも言えませんが、なるべく早く事件を解決したいと思ってます」

宏明は庸子だけじゃなく、全員に伝えた。

「教授がいるうちにね」

続けて、付け加えたと言った宏明。

「ところで、光一が亡くなった時、警察の人といたけど、どういう関係で…？」

健が宏明と谷崎警部の関係を聞いてきた。

健は二人がどういう経緯で知り合ったのか、ずっと気になっていたのだ。

「事件で知り合いになって…」

宏明は遠回しに答えた。

「あ、そうなんですか」

健は笑って納得してくれた。

内心、宏明はホッとした。

ここにいる全員からしたら、いくら宏明がいくつかの事件を解決しているからといって、警部と知り合いだなんて、普通では考えられないと、宏明自身思っていたからだ。

「光一の事で何かわかったんですか？」

庸子は心配そうに聞いた。

「いや、全く…」

宏明は光一のダイニング・メッセージの事を伏せて答えた。

「そうか。何かわかったらいいのにな」

庸子は光一の事を思ってたか、一人呟いた。

庸子の横顔は、どこか寂しげな表情をしていた。

「そんなに気を落とさないでよ、庸子」

有沙は庸子を元気づける。

でも、庸子は頷くだけだった。

「薬丸さん、右手の怪我はどうしたんだ？」

中谷教授は庸子の右手の甲に巻かれた包帯に気付いた。

「家で怪我しちゃって……」

庸子は苦笑しながら答える。

「ドジだな」

健も苦笑している。

そう言われて苦笑したままの庸子。

「事件の話に戻るけど、あの警部さんは何か言ってこないんですか？」

有沙は話題を事件に戻して、宏明に聞いてきた。

「特に何も……。今回は元山さんが亡くなった、ということで、警部もなかなか話してくれないもんで……」

途方に暮れた口調の宏明。

「大物政治家の息子だから警察も話せない、ということか。それで、二葉さんは行き詰まってるというわけですか」

「ニュースから流れる少ない情報で、なんとか事件解決してみせませうけどね」

強気の宏明。

しかし、強気で言ったものの、どうしようか考えていた。今回の事件は、自分にとって厄介な事件である。

「とにかく、早く事件を解決してもらいたい」

中谷教授はなぜか少し怒り口調で言い、立ち上がった。

大学を出て、中谷教授達と別れると、宏明は光一の家へと向かった。まだ色々聞きたい事があるからだ。

——元山さんの家族に質問はあるけど、個人的には中谷教授にも聞

きたい事がある。

光一の家に向かう途中、そう思っていた宏明。
中谷教授が他の大学へ異動になったこと。

光一が殺害されただけで、日本史の展覧会に連れていった中谷教授に、非があるとは考えにくい。確かに、日本史の展覧会に行った事も殺害する動機になるといえば、そうなのかもしれない。だけど、そのことが中谷教授の異動の直接的な理由になりにくい。

——他に何か理由があるはずだ。オレらには語らなかつた別の理由が……。きっと中谷教授は何かを隠してる。
と、感じていた宏明。

それと、さっきの少し怒った口調の言い方。普通、自分が犯人ではなければ、そんな言い方はしないはず。むしろ、犯人が誰だか知りたい心情のはずだ。その二つの事を気になりながらも、宏明は光一の家に到着した。

光一の家の前には、何人かの記者が張り込んでいた。「光一さんの友人ですか？」と、記者に聞かれて、「はい」と手短に返事をし、インターホンを押し家の中へと通された。そして、この前通された来客室へ入った。

「二葉さん、でしたっけ？」

誠一が紅茶をすすった後に聞いた。

「あ、はい、そうです」

宏明は慌てて返事をする。

「警部さんとはどういった関係で…？」

本日二度目の質問を受けた宏明。

「事件で知り合いになったんです」

「そうでしたか。で、今日は何の用で…？」

「光一さんの事で少し聞きたい事がありました…」

「なんでもお聞き下さい」

誠一は快く言ってくれた。

「光一さんが亡くなる前に、悩み事や何かに怯えていた、というこ

とはありませんでしたか？」

宏明の質問に、誠一は少し考えてから、
「わかりませんな。何しろ、私や妻は何かと忙しいもんですから…。それに、光一はいつもチャラチャラしていて何を考えているのかわからない、といったところですよ」
前と変わらず同じ口調で答えた。

——あまり自分の息子には興味がないってところか…。

誠一の答えを聞き、そう思ってた宏明。

「そうですか。光一さんは一人っ子さんですか？」

「いや、四人姉弟です。一番上が娘で、残りが三人が息子で…。光一は末っ子さんなんです」

誠一は警察じゃない宏明に心許して答えてくれる。

「二葉さんは？」

「三人兄弟で、オレも末っ子です。オレのところは、兄が二人いますけどね」

「そうでしたか。あ、すいませんね、話がそれで…」

誠一は頭をかき謝った。

テレビで見るより気さくな人だと宏明は思った。

「事件当日に警部から色々お聞きしたので、最後の質問になりますか——」

宏明は一旦言葉を切ると、紅茶を一口飲んだ。

誠一は宏明の顔をまじまじと見ている。

「薬丸さんと付き合ってたと聞いたんですが、どんな感じの付き合いだったかわかりますか？」

宏明は庸子本人には聞きにくいので、誠一なら何か知ってるかもしれないと思い尋ねてみた。

「何度か家に連れてきましたね。見かけによらずいい娘さんですよ。付き合いっていても、よくわからないんですが、今どきの子とは変わらない付き合いだったと思いますよ」

誠一は庸子を連れてきたことを思い出しながら答えた。

「わかりました。ありがとうございます」

誠一の答えを聞くと、礼を言っ立ち上がった。

宏明につられて、誠一も立ち上がる。

「二葉さん、ちょっと待って下さい。渡したい物が…」

誠一は早口で言つと、来客室から出て行つた。

二、三分すると、小さな袋を持って戻つてきた。

「これは…？」

宏明は袋を受け取ると、首を傾げた。

「妻が作ったクッキーです。なんでも料理教室のほうで作り過ぎたらしくて…。良かったらもらつてやつて下さい」

「ありがとうございます」

袋に入つたクッキーをカバンの中にしまうと、玄関のほうへと向かつて歩いて行つた。

光一の家を出ると、入る前にいた記者達はいなくなり、しんと静まり返つていた。宏明はホツとしつつ、バイクに乗り自分の家へと向かつた。

まだもう一つ聞きたい事があつたのだが、この事件の間にまた会えると思ひ、聞くのを止めた。別に聞いても良かったのだが、特に今すぐではなかつた。

宏明にとつて、光一の両親が光一に関心がないのか？ と、いう疑問があつた。

——なんで、あんなに関心がないのか？ 自分の息子だというのに…。

宏明はこの事を聞こうとしていたのだ。だが、他人の親子関係を聞くのは失礼だと思ひ聞けなかつた、というのが、宏明の心境だつた。いくら、事件の事だとはいえ、自分は警察官でも何でもなし。ただの大学生でしかないのだ。谷崎警部の知り合いだというだけで、光一の両親には事件の質問をさせてもらつてゐるだけなのである。宏

明はそんな自分をもどかしく思っていた。
そして、自分の家庭と光一の家庭をリンクさせていた。

その日の夜、宏明のケータイに谷崎警部から電話があった。宏明は谷崎警部の声を聞くとホッとした。

「久しぶりだな、二葉君」

谷崎警部は疲れている様子だった。

「そうだな。事件のほうは進んでるのか？」

「色々聞き込みをしているんだがね」

「なかなか成果が上がらないんだな」

宏明はため息まじりで言う。

「今日、教授に呼ばれて大学まで行ったんだけど、教授が違う大学へ異動になったんだ」

宏明は昼間の事を思い出して、谷崎警部に伝えた。

「今回の事件の件が理由だそうだ」

「いつ行くんだ？」

「来週には行く予定だって言ってたけど…」

宏明の脳裏には、わざと明るく言った中谷教授の顔が浮かんだ。

「そうだったら早いこと事件を解決しないとな。犯人もわからないまま異動になるのは、心残りだろうからな」

「まあな。で、今日の電話の目的はなんだよ？」

宏明は電話の意図を聞いた。

「光一さん家庭の事で聞きたい事があるんだ」

今まで今回の事件の事をあまり話したり聞きたい事があっても答えられなかった谷崎警部が、さっきとは違うトーンで聞いてきた。
それほど、捜査が行き詰まってるんだらうと思った。

「光一さんの兄弟とかはわかるか？」

「四人姉弟らしいぜ。姉が一人、兄が二人だ」

宏明は今日、誠一に聞いたことを話した。

「光一さんは末っ子か」

電話の向こうで、谷崎警部は自分が調べた事とは矛盾していると感じながら呟いた。

「この事は本人に聞いたのか？」

続けて、谷崎警部は質問する。

「いや、違う。実は大学の帰りに元山さんの家に行って話を聞いてきたんだ」

「話はしてもらえたのか？」

「してもらえたけど…。なんでそんなこと聞くんだよ？」

宏明は逆に聞いた。

「大学の友人に“オレは一人っ子だ”と話してたそうなんだ」

谷崎警部の言葉に、宏明は自分の耳を疑った。

「だから、今の二葉君の話を聞いて隠す必要があるのかなと思ってな。一応、二葉君は何か知ってるんじゃないかと思って電話してみただ」

「一人っ子か…。なんで、一人っ子なんて言っただろう」

「さあな。我々も今調べてる最中だ」

「一人っ子だと言った理由が何かあるんだろうけどな」

そう言いつつ、宏明は次の事を考えていた。

「そういえば、今日、紀美さんが署に来たよ」

谷崎警部は話題を変えた。

「紀美が…？」

宏明は自分の心が動揺したのがわかった。

「うん。深刻そうで話を聞いたが…何かあったのか？」

「ちよつと色々あつてな」

宏明は言葉を濁してしまう。

「事件が解決すれば、紀美さんの側にいれやれ。かなり不安そうだ

「たからな」

宏明は少し考えてから、

「うん、わかった」

と、手短に答えた。

宏明はケータイを切ると、紀美にメールを打つことにした。

そう、紀美の心の中にある不安を打ち消すためにも…。事件が解決したら、紀美に本当の事を話すためにも…。

二枚の写真

翌日の午後、谷崎警部から

「教授に話があるから今から大学に行く」という連絡が入った。宏明は何か情報が入るかもしれないと思い、行くことを決めて、家を出る前に中谷教授のケータイに一声かけておいた。

中谷教授の部屋に着くと、谷崎警部はまだ来ていなかった。

宏明が来てから、二、三分すると谷崎警部がやって来た。

「二葉君、来ていたのかね？」

谷崎警部はさほど驚いた様子もなく言った。

むしろ、宏明が中谷教授の部屋に來ると予知していたようだ。

「うん。さっき来たばかりだ」

「そうか。じゃあ、早速ですが…」

イスに腰をかけると同時に話を始めた。

「二葉君に聞けば良かったのですが、国立博物館には何をしに行かれたんですか？」

「日本史の展覧会がやっていたので、生徒と行ったんです」

中谷教授は谷崎警部の目をまっすぐ見て言った。

「なぜ、六人を…？」

「生徒の中で一番私になついてきてくれるもので…」

「それは授業後に授業の事を聞きにきてくれたり、とかですか？」

谷崎警部は手帳から目を話して聞いた。

「そういうことです。私と二葉君の父親が知り合いで、小さい頃から二葉君の事はしっていました…。二葉君の彼女は、二葉君が誘ってきてくれたんです」

中谷教授の話に、驚いた表情を見せる谷崎警部。

「本当か？ 教授と二葉君の父親が知り合いってのは…」

「そうだ。高校時代の先輩後輩同士なんだ。教授が先輩、親父が後輩」

宏明が説明すると、納得した顔つきになった谷崎警部。

「お話はよくわかりました。しかし、大学の教授が生徒を誘って日本史の展覧会でしたっけ？　そういうのに行くというのは珍しいですな」

谷崎警部は物珍しい様子でいる。

「ええ、一度は生徒と課外授業をやってみたいなと思ひましてね。大学だとなかなかそういうわけにはいかなくて、今回、ダメ元で誘ってみようと思い、誘ってみたんです」

中谷教授は照れながら答えた。

——そんなこと思ってたんだな…。

宏明は中谷教授を見て思った。

「ついに願ったというわけですね」

「元山さんってどういう人だったんですか？　一回しか会ってないし、よくわからなくて…」

宏明は遠慮がちに聞いた。

「外見はチャラチャラしてるが、中身は実に真面目な青年だ。人間は外見では判断してはいけないというのは、こういうことだとつくづく思ってるんです」

中谷教授は宏明だけじゃなく、谷崎警部にも言った。

「あ、お茶も出さずにすいません」

中谷教授は思い出したように言った。

「いえいえ、そんな…」

「遠慮なさらずに…。コーヒーがきれていまして、缶コーヒー買ってきます」

そう言うのと、中谷教授はカバンから財布を取り出し、部屋を出て行った。

谷崎警部は呆れたようにため息をつきながら、部屋を出て行く中谷教授の後ろ姿を見た。

宏明は立ち上がり、中谷教授の机のほうへ行った。

机の上には、色んな書類や資料が置いてある。まだ異動の用意はし

ていないようだ。

「教授と二葉君の父親が知り合いとはね」

「まさか、この大学で会うとは思わなかった。最後に会ったのが、七年前、オレがまだ中学の時だったから…」

谷崎警部に背を向けて話す宏明。

「入学して、大学の中庭で会った時、驚いたぜ」

宏明は中谷教授と再会した日のことを思い出していた。

あれは入学してすぐのことだった。茂と二人で大学内を散策していた時、一人の中年男性とすれ違った。向こうは気付いてないみたいだったが、宏明はすぐに気付いた。宏明は後を追いかけて、中谷教授に声をかけた。首を傾げる中谷教授に“二葉です”と言うと、すぐに思い出してくれたのだ。

それから、数日後に二人で会うことになったのである。

「中谷教授は親父の言うとおりの人だ」

「そうか」

「学科は違うからたまにしか会わないけどな」

そう言った宏明の目に、伏せて置いてあった写真立てが目に入った。写真立てを手に取ってみると、十五年程前に取られた、まだ三十代前半くらいの中谷教授と幼稚園くらいの男の子と二人で写っている写真だった。

——教授って子供いたんだ。この前、家に行った時は子供がいるという雰囲気ではなかったけど…。この写真の男の子は幼いけど見たことあるような顔だな。

宏明は最近会ったことのある人物と写真の中の幼い男の子を照らし合わせていた。

「二葉君…？」

谷崎警部は写真に見いつている宏明に近付いてきた。

それと同時に中谷教授が入ってきた。

宏明は写真を元に戻し、中谷教授のほうを見た。

「遅くなりましてすいません」

中谷教授は缶コーヒを三本持ち、息を切らせて言った。

「こちらこそ、お手数をかけまして…」

谷崎警部は缶コーヒを受け取りながら言う。

宏明は中谷教授をじっと見ている。

「二葉君、何か…？」

「あ、いや、なんでもないです」

宏明は慌てて顔を横に降ると、缶コーヒを開けた。

それから三十分、中谷教授の部屋でゆっくりとし、二人は部屋を後にした。大学の正門の前で、谷崎警部と別れて写真の男の子の事を思い出せずにいた宏明は、生徒のバイクの駐輪場の近くで、庸子とばったり会った。

「あ、薬丸さん…」

「二葉さん、事件のほうはどうですか？」

庸子はハキハキとした口調で聞いてきた。

「いや、全く…」

「事件解決するのって難しいですね。何か手伝える事があつたら言つて下さいね」

庸子は宏明に色目を使っている。

その庸子に引き気味の宏明。

「ええ、わかりました」

上ずった声になってしまう。

「それより、その袋は…？」

宏明は話題を変えようと、庸子が持っていた袋に目をやった。

「あ、これですか？ これは高校時代の写真です。サークルのみんなに見せようと思って…見ます？」

宏明が答える前に、庸子は袋から写真を出した。

——今日は写真に縁がある日だな…。

庸子が写真を出すのを見ながらそう思っていた宏明。

そして、説明を受けながら見ていく中で、最後のほうに庸子と一人の女性と二人で撮られた写真が、宏明の中で気になった。

——この写真…。

「二葉さん…？」

「この女性は誰ですか？」

「私の五つ上の姉です。今、化学工場で働いてるんですよ」

「そうなんですか」

何か気になりながらも庸子とは似ても似つかない清楚で大人な感じの姉を見つめた。

「二葉さんったら姉を見つめちゃって…。なあんか、妬いちゃうなあ」

庸子は頬を膨らませて宏明を見る。

答えられない宏明を想う庸子の気持ちに、どう対応しようか考えながら庸子を見た。

「そんなふうには…」

「冗談よ。私、そろそろ行きますね」

「あ、はい…」

庸子からやつと解放されるとホッとした宏明から笑顔をもれた。

——薬丸さんには姉がいるんだな。教授の時も聞いたら良かったかな。

そう思った宏明だが、写真立てが伏せて置いてあっただけに聞きにくかったのだ。

——見られるのが嫌だったか、あるいは知られたくない何かがあるかのどちらかな。

中谷教授が写真を隠すように置いてあった理由がよくわからないでいた。

その日の夜、何を思ったのか自分の部屋を掃除し始めた宏明は、まだ捨てられてない高校時代の教科書を発見した。

——もう捨てたって思ってたけど、まだ何冊か捨ててないのがあったんだな。

その中で日本史の資料集を見つけた。

——日本史……。どうも苦手だよなあ……。

そう思いながら、ペラペラと資料集をめくっていく。

途中まで来ると、国立博物館でやった古代国家の場面が出てきた。

——国立博物館を思い出すな。

次のページをめくると、光一が残したダイニング・メッセージと重なる部分があった。

——これは?! 元山さんのダイニング・メッセージで犯人がわかったけど、トリックも証拠もない。しかも、あの人には明確なアリバイがある。

宏明は中谷教授から国立博物館に誘いがあった時からついさっきまでの出来事を思い出していた。

宏明は自分の頭をフル回転させるために、台所へコーヒーを入れに行き、戻ると再び事件の事を考え出した。

——元山さんのダイニング・メッセージを証拠にしてもいいけど、それだけじゃとても弱すぎる。それに、伏せて置いてあった中谷教授とあの幼い男の子の写真が何を意味してるのかも知りたいよな。中谷教授の部屋で見た幼い男の子との接点がわからずにいた。

宏明には思い出した事があった。それは、前に大学内で歴史の捏造があったと友達に聞いたことがあった。

どの学年もその話題で持ちきりだったが、二ヶ月もすると誰だかわからない上、本当かどうか定かではないため、すぐに噂として終わってしまった。

——もしかして、“あれ”は噂じゃなくて本当だったのかもしれない

い。教授が関係してるんじゃないかな。そのことが異動の本当の理由かもしれない。

マグカップを見つめながらそう思っていた宏明は、ケータイを取り出して谷崎警部に電話をかけた。

四人の話

翌日の昼、宏明は弱すぎる証拠をもつと強力にするために、光一の両親や友人である健達に電話でアポを取り、話を聞くことになった。みんな、警察より親しみがあるし、しつこくないという理由から快く応じてくれた。

まずは光一の家へと向かうことになっている。今の時間帯は亜矢だけしかいないとのことだが、宏明はそれでも良かった。前に誠一から話は聞いているし、本当は光一の姉弟からも話は聞いたかったのだが、それは仕方ないと思い、光一の家のインターホンを鳴らした。すぐに亜矢が対応すると、来客室に通された。

亜矢は紅茶とクッキーを持ってくると、宏明の前に置き、向かいのイスに座った。

「すみません。急に押しかけて…」

「コ―ヒ―派の宏明は、紅茶に砂糖を多めに入れながら詫びた。

「全然、構いませんよ」

亜矢はニツコリと笑顔で答えてくれる。

「前にお伺いした時、記者が張り込んでいたんですが、今はいないんですね。何も聞かれずに済みましたよ」

本題に入る前に、光一の家に着いた時、前にいた記者がいないのに気付いた宏明はさりげなく言ってみた。

大物政治家の息子が殺害された大事なニュースなだけに、犯人がわかるまで張り込んでいるものだと思っていたからだ。

「光一が亡くなって毎日のように張り込まれていましたよ。でも、その時だけで四、五日前からは全く…。今はニュースでも取り上げていませんからね。本当にヒドイ話ですよ」

そう答えると、亜矢は少し淋しそうな表情をした。

亜矢のその表情を見て、光一に対してあまり興味を持っていない、素っ気ない態度を取っていたのを裏腹に、本当は光一が亡くなって

淋しいんだ、もつと側にいたかったんだ、と宏明は痛感した。

「報道するほうも見るほうも考えて欲しいもんですね」

淋しさを隠すように亜矢は続けた。

「そうですね。嫌な話をしてすいません」

宏明は本題に入る前に自分の興味本位で聞いてしまったことを素直に謝った。

「いいんですよ。それで、お話つてのは…？」

亜矢は淋しさを断ち切るようにカップソーサを持ちながら聞いた。

「今日、お伺いしたのは察してると思いますが光一さんのことで…。あまり思い出させたくはないんですが大丈夫ですか？」

宏明は遠慮がちに聞いた。

「いいですよ。二葉さんて本当に気遣いが上手いんですね」

紅茶をすすった後に優しく微笑みながら言った。

突然の亜矢の言葉に、一瞬、理解が出来なかったが、理解すると宏明は照れてしまった。

「いやいや、とんでもない。そんなことないですよ」

両手を大きく横に振る。

「警察の方も二葉さんみたいに気遣いが出来たら…。あ、すいません…話がそれてしまいましたね。光一の何が知りたいんですか？なんでも聞いて下さい」

「はい。光一さんのアルバムを見せて欲しいんです。出来れば幼少の頃からの…。いいですか？」

「はい。今、持ってきますね」

亜矢は立ち上がると、小走りに来客室を出た。

すぐに戻って来ると、何冊かのアルバムと紙袋を持ってきた。

「こつちが幼少の頃のアルバムです。この袋に入ったのが、光一が使い捨てカメラで友人と撮った写真です」

宏明は全てを亜矢から受け取ると、光一の幼少時からのアルバムを開いた。

幼少時の光一は、今と面影が変わらず、クルクルと回る表情が愛ら

しい。しかし、中学中盤になってくると、宏明が亡くなる前に会ったような光一が目立ってきている。

「光一さんはいつ頃からこんな感じになったんですか？」

「中二の夏休み明けです。友達の影響なんでしょうね。それまで真面目だったので夫共に驚きました。それ以来、先生に何度か呼び出される事が多くて…。その度に夫は怒ってましたが、それでも言うことを聞かなくて、夜遊びをしては補導ばかりでした」

当時を思い出しながら語る亜矢の口調からは、大変さが窺える。

「補導されていたのは中学時代だけですか？」

「そうです。高校は二回も停学になりましたが、なんとか卒業してくれたんです」

包み隠さず答えてくれる亜矢に、宏明は感心してしまう。

それに、中谷教授が言っていた、「真面目な青年」というのも中学途中で変わった光一を見ているとうなずける。目的を持って大学に入ったのだから、変わっても根は何も変わっていないのだとわかる。次に使い捨てカメラで撮られた写真を見ると、中学よりも高校のほうが学校生活を楽しんでいる様子だ。その中に庸子と付き合っていた頃の写真も交じっていた。昨日、庸子に見せてもらった写真で見た、庸子の姉と庸子と三人で撮られた写真が一枚あった。

——薬丸さんの姉とも知り合いだったんだな。まあ、元山さんが薬丸さんの家に遊びに行けば自然と顔を知ることになるか…。

そんなことを思いながら、一通り写真を見ると袋に入れた。

「光一さんて政治家の父親を持つてどう思っていたんでしょうね？」

宏明は目を合わせずに聞いた。「怒ってばかりの父親だと思ってたんじゃないでしょうか。さっきも言ったとおり、夫は事あることに怒ってばかりだったんで…。私の知る限り、褒めることはしていません」

亜矢は右手を顎に当てて答えてくれた。

「そうですか。ありがとうございます」

宏明は礼を言くと、帰る支度をする。

「何か役に立ちましたか？」

「ええ、まあ、少しは…」

苦笑いしながら遠回しに返事する。

「何かあればいつでも言って下さいね」

「わかりました」

さつきと同じ淋しそうな表情になった亜矢に、宏明はドキリとしたが、それを隠した。

それから、宏明は光一の家から健と有沙と庸子と待ち合わせ場所である健の下宿先へと向かった。約束の時間から五分程遅れた宏明は、三人に詫びた。

「二葉さん、お久しぶりです」

健は笑顔で言ってくれた。

「久しぶりです。みなさん、元気ですか？」

宏明は上着を脱ぎながら聞いた。

「今のところは…。二葉さん、コーヒー飲みます？」

「はい、飲みます」

宏明の返事を聞いた健は、マグカップにコーヒーを入れて渡した。

「二葉さんと会えて嬉しいわ。昨日も会って今日も会えたもん」

庸子はキラキラした笑顔になっている。

宏明の胸中は、また始まった…。オレを見るといつもこうだ、と思っていた。

もう庸子に対してこんなことしか思わなくなっていた。

「早速なんですが、光一さんが友人に“オレは一人っ子だ”なんて言っていたのを警部から聞いたんですが、本当ですか？」

谷崎警部から仕入れた情報を、事実かどうか自分の耳で確かめたかった宏明は、健達に聞いた。

「それ、本当ですよ。元々、光一は自分の家族のこと話したがいんだけど、兄弟のことだけは“一人っ子だ”って言ってたんです」「私も付き合ってた頃に、“オレは一人っ子だ”って聞いてたもんだから、光一の家に遊びに行った時に、お姉さんやお兄さんがいたから変だなって思ったんです」

健の後に庸子も答えてくれた。

「その後に元山さんに“一人っ子じゃないじゃない”って言いましてか？」

宏明は庸子に聞いた。

「勿論、聞いたわよ。光一は“別にいいだろ”なんて言ってまともに対応してくれなかった」

庸子は口を尖らせる。

「それはいつ頃ですか？」

「高校卒業してすぐよ」

「そうですか。浦井さんはどうですか？」

「私は直接聞いたわけじゃないけど、庸子に聞いてて知ってました」

「光一はなんで“一人っ子”って言ったんだろ？」

庸子はずっとわけがわからないでいたのだ。

「そう言った理由が何かあったのかな？」

有沙も庸子同様、光一の発言の意図がわからないでいる。

「なんででしょうね。元山さんの両親が語ってくれば一番なんですけどね」

そのことに関して何もわかってない宏明も首を傾げる。

「さっき元山さんの家に行ったんですが…」

話題を帰る宏明。

「写真見せてもらって、薬丸さんと付き合ってる頃の写真ありましたよ」

過去のことを言ったら悪いなと思いながら、光一のことを口にした宏明。

「ヤダー!!! 光一のお母さん、あの写真まだ持ってるの?! 捨

てておいてつて別れる前に言ったのに――!!」

庸子は外まで響くような大声で過去の過ちのように言った。

「いいじゃねーの。光一の親からしたら大切な息子の残してくれた写真なんだから…。庸子からしたら、思い出したくない過去かもしれないけどさ」

健はなだめるように言う。

「そうよ。光一と付き合ってた事実は変えられないんだよ」

有沙は最もなことを言う。

「そうだけど…。二葉さんだけには見られなくなかったな。だって、恥ずかしいんだもん」

庸子は頬をふくらませる。

宏明は驚きながら三人の会話を聞いている。三人の会話が事件の真相に少し近付いたからだ。

「過去の話をしてすいません。元々は元山さんと好きで付き合ってたわけだし、別に恥ずかしがらなくてもいいと思いますよ」

宏明は心の動揺を隠しながら庸子に伝えた。

「そうよね。二葉さんにそう言われるとそうなんだって思っちゃった」

フッフ…と笑いながらの庸子。「庸子ってば単純なんだから…」

呆れ顔の有沙。

「いいのよ」

庸子が言った後に、宏明のケータイがバイブした。

見ると、谷崎警部からで後で連絡が欲しいとメールが送られてきた。昨夜の電話の件だと直感した。

「わかりました。ありがとうございます。また何かわかれば連絡します」

宏明はケータイを片手に三人の顔を見た。

意外な真実

二日後の午後、宏明は事件の真相を話すことになった。

会場は光一の家の来客室だ。

来客室には光一の両親は勿論、今回の事件関係者と谷崎警部が集まった。

「二葉さん、そろそろ…」

腕組みながら目を閉じて、何か考え事をしている宏明は宏明に、健が心配して言った。

健の言葉に目を開き、何かを決意したように立ち上がり、全員の前に立った。

「事件の真相がわかったって本当なんですか？」

亜矢が疑いの目を宏明に向けた。

「はい、わかりました。光一さんが残したダイイグ・メッセージもね」

宏明はいたって冷静な口調で答えた。

「ダイイグ・メッセージ…？」

庸子が首を傾げる。

「光一さんが犯人に会う前に書いたダイイグ・メッセージです。

何かあった時のために…」

「何かあった時のためについてことは、予め光一が何かを予感してたってことよね？」

有沙は顎に手をあてて聞いた。

「そうです。光一さんの死因は青酸カリですからね」

宏明の言葉に、谷崎警部以外はえつと声を漏らした。

「青酸カリって…猛毒の…？」「はい。シアン化カリウムの俗称で、

無色の粉末。人の致死量は、0.15gなんです。検死結果、光一さんは致死量の倍、0.3gも飲まされて殺害されたようです」

宏明の代わりに谷崎警部が答えた。

それを聞いた全員は、驚いた表情を見せる。

「…というふうに、犯人は青酸カリを入れて殺害したんだ」

「何に入れたんだ？」

誠一は聞く。

「殺害現場には、手作りのお菓子とリンゴジュースが入ったコップが二つありました。恐らく、手作りのお菓子は亜矢さんが作ったものでしょう」

「まさか亜矢が…？」

誠一は亜矢のほうを見て言った。

「違います。青酸カリが入っていたのは、リンゴジュースのほうなんです。犯人が光一さんの部屋に入った時に、光一さんに気付かれずにリンゴジュースに混入したのでしょうか」

宏明は軽くため息をついた。

「ダイイイグ・メッセージはどういう意図で、なんで書いたんだ？」

中谷教授は首を傾げている。

「光一さんと犯人の間に何かがあつたのでしょうか。光一さんは犯人に何か後ろめたいことをしたんだと思います」

「光一が何か後ろめたいことをした…？」

有沙はわからないでいる。

「それは犯人に聞いてみないとわかりませんが、犯人にとって光一さんのやったことが許せなかった、というのが心境です」

「待って下さい。光一が殺害された時刻つてのは、全員アリバイがあるんですよ？ それをどうやって光一を殺害したんですか？」

健は宏明に食って掛かるように聞いてきた。

「そうですね。アリバイがあるから、ここにいる全員には犯行は無理なんじゃないの？」

庸子も健と同意見のようだ。

他の全員もそのようだ。

「確かに全員には確実なアリバイがあります。だけど、服装や髪型を似たような物にすればどうですか？」

宏明は全員に問いかけてみる。

「まあ、後ろから見たらわからなくもないが…」

「前から見たら顔でバレますよ」

中谷教授と有沙は交互に答えた。

「兄弟で瓜二つのように似ていたら…？　もし、似ていたら、わからないんじゃないんですか？」

「そうだけど…。一体、何が言いたいんですか？　さっきから二葉さんの言ってる意味が全くわからないんですが…？」

誠一は不快感を示して言った。宏明は誠一の言葉を聞き流して、

「では、ダイイグ・メッセージの意味を説明しましょう」

「そうしてくれ」

誠一はまだ不快感を示しながら頷いた。

「光一さんが残してくれたダイイグ・メッセージというものは、

“縦に四つ、横に三つ交わった場所”というものです。オレも最初何のことだかさっぱりわかりませんでした。しかし、数日前に日本史の教科書を見て、ダイイグ・メッセージと同じ図があったんです」

宏明は一気に言うと、全員ダイイグ・メッセージの意味を考え始めた。

「全くわからないな」

谷崎警部はお手上げだという声で言った。

「もしかして、平城京の図ですか…？」

有沙は恐る恐る聞いてきた。

「正解です。“縦に四つ、横に三つ交わった場所”というのは…」

「薬師寺だ」

宏明の後に、中谷教授が言った。

「薬師寺が何か…？」

「この三文字で名字に入ってる人がいるんです」

少し間をあけて、有沙が顔色を変えた。

「まさか…」

「そう、そのまさかです。光一さんを殺害した犯人は、薬丸さん、あなたですよ。」

宏明は庸子のほうを向いて言った。

「な、何言ってるんですか？ 私が犯人なわけないって……」

庸子は突然のことに声を震わせている。

「あなたは殺害する数日前、光一さんに家に遊びに行くとも言い、殺害を計画した。光一さんを殺害した日、あなたはスキを見て、青酸カリをリンゴジュースに入れた。何も知らずに飲んだ光一さんは苦しみだし、息が無くなったのを確認して、その場を立ち去った。事前に書いたダイイグ・メッセージが残されているとも知らずに……」

宏明は静かな口調で庸子に言った。

庸子は何も言わずに唇を噛んでいる。

「アリバイはどうするのよ？ 光一が殺害された時間、私はゲーセンにいたんだよ？」

庸子は自分のアリバイを主張してくる。

「確かにそうだ。さっきも言ったとおり、兄弟で瓜二つのように似ていたとしたら、話は別です。この前、大学に来た帰りに薬丸さんと会いました。その時にあなたが見せてくれた写真の一枚に、ある写真を見たんです」

「ある写真……？」

「薬丸さんとお姉さんと二人で撮った写真です。当たり前ですが、お姉さんはあなたに似ています。それに化学工場で働いています。お姉さんをあなたの格好をさせて、ゲーセンに向かわせたんじゃないですか？」

宏明は問い詰める。

「まさか。なんで、姉を私の格好をさせなきゃダメなの？」

「あなたが光一さんを殺害するためにです」

庸子の目をまっすぐ見て宏明は答えたが、庸子はのほうは目を反らしたままだ。

「青酸カリはどうやって手に入れたの？」

有沙が気になって聞いてきた。

「薬丸さんがお姉さんに頼んで持ち帰ってもらったんでしょう」

「姉が私に頼まれたからって青酸カリを持ち帰ってくるはずないわ」
庸子はきっぱりと否定した。

「頼むにしても、青酸カリがどんなものか見てみたいって言えばどうでしょう？」

「それもないわ。姉はそんな頼みなんか聞くはずないもん」

庸子はだだっ子のように言うと、プンと顔を横に向けた。

そんな庸子の態度に、宏明は呆れた表情をした。

「お姉さんは薬品を部屋に置いてありますか？ それとも、置いてあったって知ってましたか？」

「さあ…。知らないけど少しはあったと思う。姉の部屋には入ったことないから…」

「その中に青酸カリは？」

「だから、そんなものはないって」

庸子はイラつかせながら答える。

「なぜ、ないとわかるんですか？」

「そ、それは…」

急にうるたえ始める庸子。

「部屋には入ったことないのに、青酸カリがないとはつきり言えるのはおかしいですよ。よっぽど印象に残ってたんですね」

宏明の言葉に、庸子はもつとうるたえる。

「それだけ言うなら、私が犯人だと言う証拠はあるんですか？」

「証拠はちゃんとありますよ」

証拠があると言われ、庸子はハツとなった。

「光一さんが発見された日、悪いですが、紅茶のカップについた指紋を全員分採らせていただきました。リングジュースのコップと紅茶のカップについていた指紋が、一人だけ一致する人物がいました」
次に谷崎警部が険しい表情で言った。

「それが薬丸さんだったんですか？」

わかっていたが、亜矢は聞いてみる。

「そうです。運よくリングジョースが入っていたコップに指紋が残っていたんですよ。それに、調べてみると、薬丸さんのお姉さんが働いている化学工場で青酸カリが0.3gなくなっていると上司の方が話してくれましたよ」

谷崎警部は亜矢の質問に答えるように言った。

来客室はしんと静まり、宏明が庸子のどちらかが口を開くのを待っている様子だ。

「…バレたんなら仕方ないか…」

庸子は観念したように呟いた。

「じゃあ、君が…？」

中谷教授は目を丸くして庸子を見た。

庸子は頷いてから、

「私、光一と付き合ってたこと知ってるでしょ？ 付き合ってたけどどうしても別れないといけない理由が出来てね」
伏し目がちで話し出した。

「別れないといけない理由ってなんなのよ？」

有沙は話が見えてこない様子でいる。

「光一が浮気したからよ。あの時は何度も話し合った結果、私達は別れることになった。ただ、あの時、光一は浮気相手のことを全く話してくれなかったのが気掛かりだったけど…」

庸子は目に涙をためて、別れた当時のことを思い出しているのか、弱々しい声で話す。

「光一の浮気だけで殺害なんて、そんなこと…」

健は途中で言葉を失ってしまう。

「浮気だけで殺害なんてバカらしいって思うでしょ？ 私の知らない相手だったらそんなこと思わなかった。でも、相手が相手だったから…」

「浮気相手って誰なの？」

「私の姉よ」

庸子の告白に、全員は驚きの表情を見せた。

宏明でさえ、予期してなかった庸子の告白に啞然としてしまう。

「一回生の夏頃から光一は姉と私に内緒で付き合ってた。そのことを知ったのは、ちょうど一ヶ月前のことよ」

「なんで知ったんだ？」

中谷教授は聞く。

「姉の部屋に用があつて入った時、机の引き出しの中に二人で撮った仲良く笑顔で写ったプリクラが数枚出てきた。その時、“浮気相手は姉だったんだ”って直感的に思ったわけ」

庸子の頬に伝う涙を拭いながら話してくれる。

「しかも、あの頃、姉は中絶手術をしたの。当時、姉は光一の子供を妊娠してたつてわけ。姉は“彼氏との間に出来て、彼氏が父親出来ない”って言われたから墮ろしたつて、私だけに話してくれたわ」
庸子の目には涙に滲む目から、姉とかつての交際相手を憎む憎悪の目に変わっていた。

「殺害を決意したあなたは、お姉さんの部屋から0.3gの青酸カリを盗み取り、リンゴジュースのカップに入れたつてわけですね」
宏明は庸子を見据えた。

「そうよ。私、今でもこんなに光一のことを好きなのに…。別れてもやり直そうと思えば、やり直せたはすなのに、なんで殺してしまつたんだろ…」

庸子は少し後悔してるような口調だ。

「あなたに光一さんへの想いがあるんだつたら、なんでその想いを大切にしようとしなかったんですか？ 人の想いはいつか色褪せていくものだ。だけど、想いが色褪せていく前に、もっと自分の気持ちを出していかなかったんですか？」

宏明は庸子に語りかけるように聞いた。

「二葉…さん…」

庸子は答えられず首を横に振りながら下を向いた。

「ちょっと性格を変えれば、あなたは素敵な女性だ。なのに…」

宏明はこの先は何も言えず言葉につまってしまう。

「そういうところ、いいなって思ってたんだ。ただのファンだけで、二葉さんをずっと遠くから見てるだけで良かったのにな。二葉さんに近付き過ぎたよね」

淋しそうな笑顔で宏明に言った。

「さあ、行こう」

谷崎警部は立ち上がる。

「あ、待つて。事件とは関係ないけどまだ話が…」

宏明はバツの悪そうな表情で、谷崎警部を止めた。

「わかった。話つてのはなんだ？」

谷崎警部は再びソファに座った。

「光一さんのことです」

「光一のこと…？」

誠一と亜矢は、互いに顔を見合わせた。

「ええ。もしかして、元山夫妻のお子さんではないのではないのですか？」

宏明の質問に、誠一と亜矢は戸惑いを見せた。

二人以外は全員は二人のほうを見ている。

「確かに光一は私達の息子ではありません」

誠一は頷くように答えた。

「でも、なんでそのことを…？」

亜矢が宏明に質問です。

「あなた方の態度です」

「私達の態度…で…？」

「はい。光一さんが亡くなった日から、あなた方は光一さんに興味がないような、いなくなつて良かったというような態度でした。これはどうということなのか？ これもまた写真なんです、ある場所で見得ました」

宏明は全員の顔をしっかりと見て説明した。

「その写真は、中谷教授の大学の部屋に伏せて置いてあった写真です。三十代前半の教授と幼稚園児の光一さんでした。光一さんは教授の息子さんですよね？」

宏明は中谷教授に同意を求めるように見た。

「確かに光一は私の息子です。私は当時、莫大な借金があり、幼稚園児だった光一を施設に預けることになったんです

。そして、やっと借金を返済し終えて、光一が高三の夏に迎えに行つたが、すでに光一は元山さん夫妻に引き取られていました。私は光一の幸せを願い、これ以上捜すこともしませんでした」

中谷教授は当時のことを全て話した。

「大学に入つて、史学科で知つたんですね？」

有沙の質問に頷く中谷教授。

「教授の息子だとは知らずに…」

誠一はちゃんと育てておけば良かったということをし、言葉の中に含めた。

「いや、いいんです。立派な息子ですよ」

中谷教授は光一の笑顔を思い出して話した。

「話はこれで終わりです。警部…」

谷崎警部は頷き、庸子の背中を軽く叩いた。

「二葉さん、指紋以外に私が犯人だつてわかった？」

庸子の質問に、少し考えて答えた。

「二日前に茶山さんの下宿先に行った時に、あなたが犯人だと確信しましたよ」

「あの時に…？」

「はい。元山さんと付き合つてた頃の写真を元山さんの家で見たとオレが話した時に、あなたは“あの写真”と言いました。元山さんの家で見た写真は全部で数枚見ただけで、付き合つてた頃の特定の写真を見たと言つてないのに、それで変だなつて思つたんです」

答えを聞いた庸子は、感心したように宏明を見た。

「さすが、二葉さん。かなわないわ」

そう言い残すと、庸子は谷崎警部と共に来客室を出て行った。

来客室はしんと静かになった。

「なんか、切ない…ね」

有沙はまだ戸惑っているのか、声が震えている。

「うん。庸子が犯人だとは…」

二人の胸には、ポツカリと穴があいた感じだった。

二人には大切な友達がなくなったからだ。

「おばさん、元気になれるようなものもらえませんか？ 何でもいいんで…」

有沙は亜矢に言った。

「じゃあ、アップルパイでいいかしら？」

亜矢は立ち上がりながら聞いた。

こうして、事件は幕を閉じたのだった。

告げる時

事件が解決した翌日、紀美を誘い街に出た。解決の詳細と宏明がずっと隠していたことを話すことにした。

二人はファーストフード店に入り、一番奥の席に座った。

「へえ…犯人は薬丸さんだったんだ」

宏明から事件の話を全て聞き終えた紀美は、ジュースが入ってる紙カップを見つめて言った。

「元山さんがダイニング・メッセージを残してくれたお陰で、犯人はわかったけど、まさか教授の息子だとはな」

宏明は前日の中谷教授の表情を思い出しながら言う。

「元山さんは教授が自分の父親だって気付いてたのかな？」

「薄々は気付いてたと思うぜ。気付いてても言わなかったんだろうな。子供なりにな」

次に光一の顔を思い出した宏明。

そんな宏明を見る紀美。

「今回はだいぶ時間かったよね」

「まあな。薬丸のお姉さんも直接事件とは関係ないけど、一応、警察から事情は聞かれてるみたいだしな」

「宏君、もう一つの話ってのは…？」

紀美は恐る恐る話題を変える。

「あ、うん…」

宏明は返事だけすると、アイスコーヒーを一口飲んだ。

「国立博物館から気になってると思うけど、オレの家庭のことなんだ。本当は他人に話すべき話ではないと思うけど…」

声のトーンを落として答える宏明。

目をパチクリさせる紀美。

「…家庭のこと…？」

「実は、親父とお袋が離婚することになったんだ」

衝撃的な告白を紀美にした宏明。

紀美は何がなんだかわからず言葉が出ない。

それもそのはずだ。紀美から見たら、宏明の両親は仲良しに見えるからだ。今の宏明の告白で、外からでは他人にはわからないんだ、と実感してしまった。

「離婚するのはわかるけど、でもなんで…？」

やっと出た言葉の紀美には、“なんで”という言葉が浮かんでくる。「大学に入る少し前から仲は悪かったんだ。親父が家庭を顧みないつてのが主な原因かな。それにもう一つ」

宏明は自分の顔の前に人差し指を立てた。

「もう一つ…？」

「オレ、親父とお袋に放っておかれてるといっか、兄貴二人に期待ばかり持つてるんだ。幼い頃からあまり二人の期待には添えられなideいた。それは今も同じだ」

宏明は悲しい表情をしながら言う。

「いつも家では居場所がなかった。どこにいても“家族”が実家出来ずにいたんだ。大学生になってそんな子供みたいなこと言ったらねーけどな」

最後のほうはわざと明るく言った。

「大丈夫。私が宏君の居場所になるから…」

紀美は照れながら、なおかつ真剣に伝えた。

「紀美…」

「宏君が両親の期待に添えなくても、私にとって宏君は期待に添えてるよ」

紀美のまっすぐな言葉に、目を丸くする宏明。

「…ありがとう」

宏明はホッとした声を出して礼を言った。

それと同時に、宏明には国立博物館へ行った時に、光一が言っていたことを思い出していた。

中谷教授の家からの帰り道、最寄り駅が一駅違いのため、電車には乗らずに、駅前のスタバで光一とゆっくりと話す機会が出来た。

「大学卒業したら、留学しようと思ってるんです」

光一は照れながら教えてくれた。

「留学って…どこに…？」

「今考えてるのが、カナダ。中学の時に、カナダ人の友達がいたのが影響。カナダで色々勉強したいと思ってます」

「史学科にいるんだし、日本のことも教えるのもテだけだな」

宏明はアドバイスしてみる。

「そうですね。カナダ以外にも色々な国に行ってみたい。その国の歴史や土地のことを勉強したい。それがオレの今の夢なんです」

光一は目を輝かせて言った。

—— 見た目よりもしっかりしてるんだな。

そう感じたし、中谷教授の“見た目で判断してはいけない”っていう言葉もリンクしていた。

「二葉さんは国語の教師が夢でしたっけ？」

光一は宏明に話を振った。

「教師の道は厳しいみたいだけど…」

宏明は苦笑いをしながら答える。

「そんなに難しいんですか？」

「志願者が多いみたいで…。だから、今のバイトを辞めて塾の講師でもして経験積みたいなと思ってるんです」

「教育実習にも行かないとですよね」

「予定では四回生の前期に行くつもり」

宏明は何かを決意したような口調で言った。

そして、初対面だったがこうした夢や幼い頃のことや、お互いの悩み事を言い合った。

スタバを出る間際、光一は宏明にこう言ったのだった。

「二葉さん、お互い辛くても何事にも逃げないようにしましょう。」

それに、今、二葉さんが抱えてる問題があると思う。大変で苦しくても、その問題から抜け出した二葉さんは、きっと強くなってるはずです」

光一の言葉に、宏明はひどく心打たれてしまった。

そんな光一の言葉を胸に、二人はお互いの最寄り駅で別れたのだ。

そして、昨日、事件の解決後、谷崎警部と庸子が出ていった後の来客室で、亜矢が作ったアップルパイと紅茶で誰も口を開かずには食べていた時のこと。中谷教授が他の大学へ異動になった本当の理由を聞いてみた。

「教授、異動の話…」

「明日、行くんだ。行く前に犯人がわかって良かったよ」

そう言いながら、笑顔になる中谷教授。

「本当の理由を教えてくださいませんか？ オレには今回のことが非で他の大学へ異動だなんて思えないんです」

事件の真相を話している宏明より真剣な宏明に、一同は驚く。

中谷教授はフォークを皿に置き、宏明につられて真剣な表情になった。

「みんなも知っていると思うが、歴史の捏造の噂があっただろ？

あれは噂じゃなく私がしたことなんだ」

中谷教授の衝撃的な告白に、史学科の健と有沙だけじゃなく宏明と誠一と亜矢もショックを受けた。

史学科である健と有沙にとっては、中谷教授を慕っていただけにショックは大きい。

「なんで、また…？」

有沙は口をパクパクさせながら聞いた。

「歴史の上をいきたくて、それでつい出来心で…」

すまないことをしたと言う中谷教授。

「それが理事長にバレてしまった、ということですね？」健が動揺

していたがしつかりとした口調で聞いた。

「ああ、そうだ」

頷く中谷教授は、後悔している様子だった。

——史学科の生徒は真面目にやってんのにな。

宏明はため息をつきながら思っていた。

「宏君？」

「ん？」

紀美の呼びかけに我に返る宏明。

「今回はオレのことで、紀美を悩ますことになってスマン」

深々と頭を下げながら謝った宏明は、紀美の顔を見れずにいる。

「宏君、顔上げてよ。話してくれて胸のつかえが取れたし、私は気にしてないよ」

紀美はいつもの笑顔で宏明に話しかける。

宏明は顔を上げて、紀美の顔をまっすぐ見た。

「これからよろしくね」

「こちらこそ。さあ、出ようか？」

「うんっ!!」

紀美は元気よく返事した。

ファーストフード店を出て、晴れた空の下、いつもの仲良しを取り戻した二人は、まばらな人混みの中、久しぶりに笑顔で歩いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3166f/>

大学生探偵シリーズ 日本史殺人事件

2010年10月11日20時44分発行